「豊後波越窯跡（なんごよう）」表面採集資料による考察[1]

上野淳也

はじめに

大分県佐伯市は、大分県の最南端に位置する。この佐伯市は、山深く、番匠川という河川に貫かれるが、その支流に堅田川がある。この堅田川の潤す主要な部分が、川の名が示す堅田と呼ばれる土地である。波越窯は、その堅田川の支流である波越川流域の波越村字「サラヤキ」に位置すると周知されていたが[2]、その陶技が現在に伝えられることはなかった[3]。

波越窯跡を訪れると、山裾に一部分、テラス状になっている部分が確認できる他は、小川沿いに陶片や窯体片が散乱しているのが確認できるのみである。その窯跡は、見る影もなく、その状況からは、あまり大きな窯ではなかったことを伺い知ることができる。

本論は、波越窯表面採集資料に考古学的検討を加えることにより、現時点において可能な限り国内窯業史上への位置付けを行なうものである。

第一章　佐伯市の歴史環境[4]

佐伯市は、かつて豊後国海部郡佐伯荘と呼称された地で、郡名が示すとおり、古来より海事に従事する土地柄である。平安時代には、豊後の最大勢力であった大神氏一族の一系統である佐伯氏が、この佐伯荘を治めた。豊後国は、建久七（一一九六）年頃に、中原親能が豊後守護職補任（筑後・肥後守護職兼任）された後、建永元（一二〇六）年頃に大友能直に豊後守護職を譲った時点より大友氏の豊後国支配が始まる。これから後、豊後国は、中世を一貫して大友氏による領国経営が成されるのであるが、佐伯は、ほぼ同期間在地の土豪であった佐伯氏が、この土地を治めた。佐伯氏は、大友氏配下中でも水軍の将として特権的な重臣の地位を固め、大友宗麟の時代には、佐伯惟定という名将を輩出した。

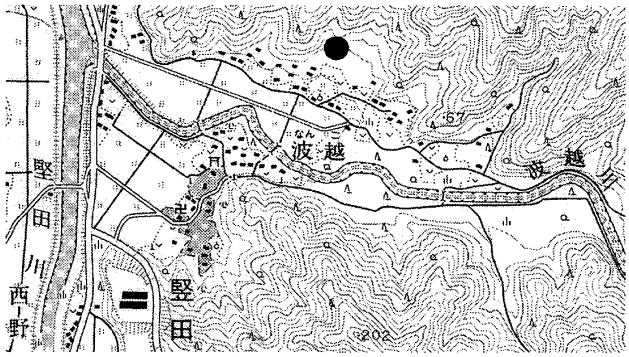
しかし、天正十四（一五八六）年には、島津氏の侵攻に対して、豊臣秀吉に救援を求め（天正十五年）、その結果として豊臣秀吉の九州侵入を促した。秀吉の九州平定後、大友吉統には豊後一国のみが安堵されたが、朝鮮出兵時（一五九二年）の失態もあって、吉統が豊後国を没収されると、大友氏の豊後国支配は終焉を迎え、佐伯氏の佐伯支配も、それと軌を一にした。この「大友仕置き」以後、豊後国は朝鮮出兵の兵站供給基盤たる太閤蔵入地から、派閥争いも絡んだ朝鮮出兵の軍功褒賞の対象とされ、次々と秀吉の側近たちが代官として赴任した。佐伯の代官としては、詳細は不明であるが、以下の諸説が考えられている。

① 臼杵代官、太田一吉が、臼杵以南の海部郡も管理したという説

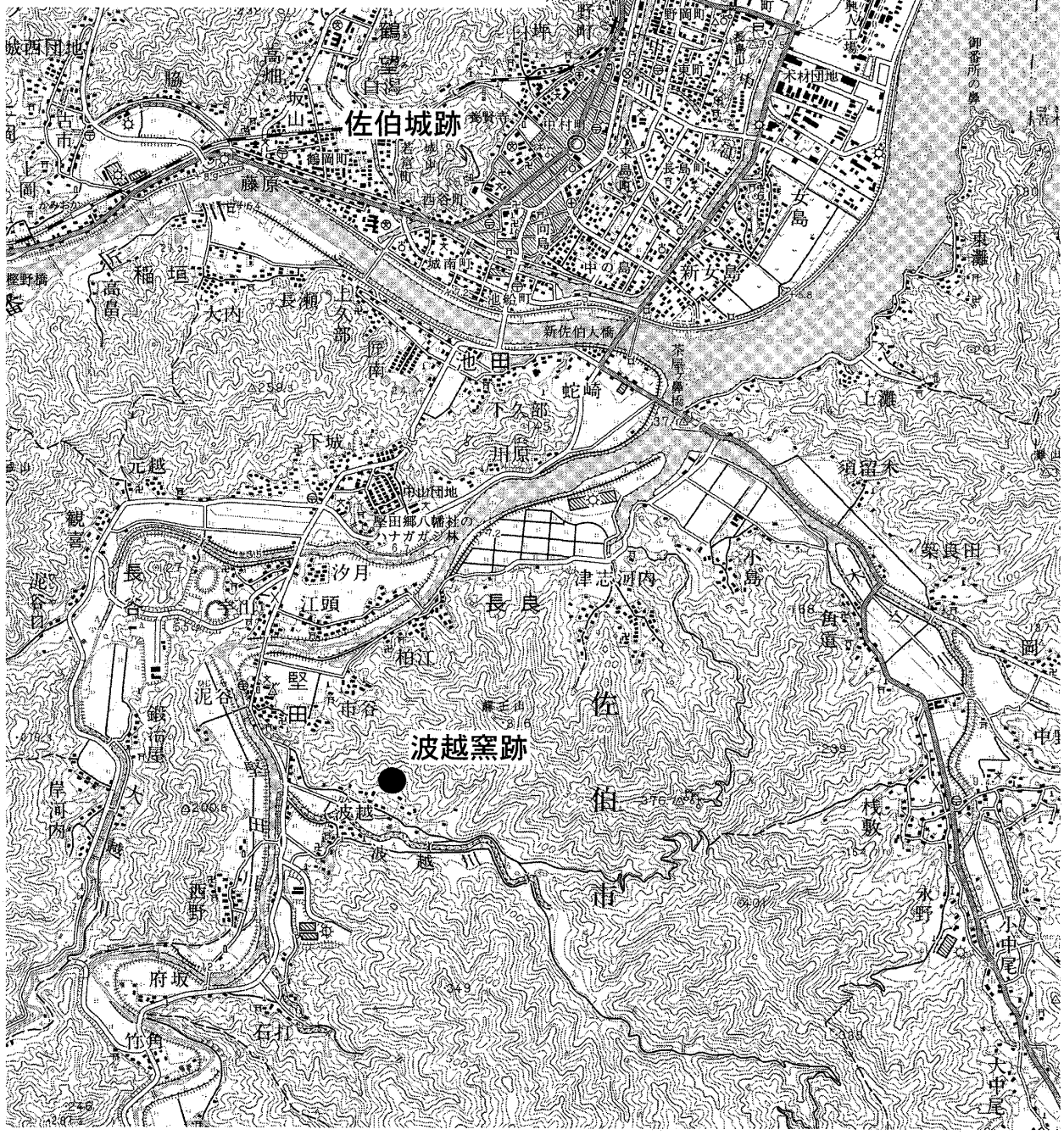
② 日田・玖珠代官、毛利高政が管理したという説

③ 太閤蔵入地であるが、代官を赴任させていなかったという説

以上の三つの説が考えられているが、秀吉の死後、関が原の戦いを経て、慶長六（一六〇一）年には、西軍に付いた毛利高政が日田・玖珠の代官から佐伯藩二万石の初代藩主として赴任した。以後、幕末にいたるまで、毛利氏の藩経営が存続する。



第2図　波越窯跡位置図（1／25000）



第1図　波越窯跡位置図（1／50000）

第二章　表面採集資料の観察

第一節　採集陶片資料

碗（1～10）

図1の1～10は、碗と推定される一群である。1～6は、碗の口縁部分であると推定される一群である。1は、丸碗の口縁部で灰釉を施し、胎土には少量の白色砂粒を含む。釉薬の掛かりの薄い箇所は暗赤灰色に発色する。口径9.6cmが復元される。2も、丸碗の口縁部でやや暗めの灰釉を施す。3・4は、灰釉を施し、4の内面には灰降りが確認できる。5は、やや焼成不良であるが、灰釉を施しているのがわかる。一部青味掛かった箇所も観察され、藁灰釉を使用していた可能性も考えられる。他の製品から、釉薬が飛んだ可能性も考えられる。6も、碗の口縁部で、器面には藁灰釉を施し、窯変を起こした箇所は青灰色を呈する。

7～10は、碗の高台部分である。7～9は灰釉（灰オリーブ色）を施し、高台部付近が露胎となっている。高台径は、それぞれ5.2cm・5.0cm・5.0cmを測る。胎土には、白色砂粒を含む。碗の内底面には、いずれも渦状のロクロ目を残し、7と8には高台内に兜巾状の盛り上がりが確認できる。また、7と9には高台部付近に窯詰め時に製品の下に敷かれたモミガラの痕跡が確認できる。7の胎土は、他の碗のものとは異なる。灰白色系の土色を呈し、器面には気泡が見られ、非常に高温で焼成されたことがわかる。焼成時のものと思われる破砕面に被熱による気泡が見られる。10は、高台径5.4cmを測り、焼成不良で釉薬の発色が悪いが、外面に灰色系、内面に白色系の発色を残し、本来は藁灰釉調の発色を成すものと推定される。9・10の高台の作りは、7・8に比べて高台を丁寧に削り出した、整然とした作りである。

皿（11～19）

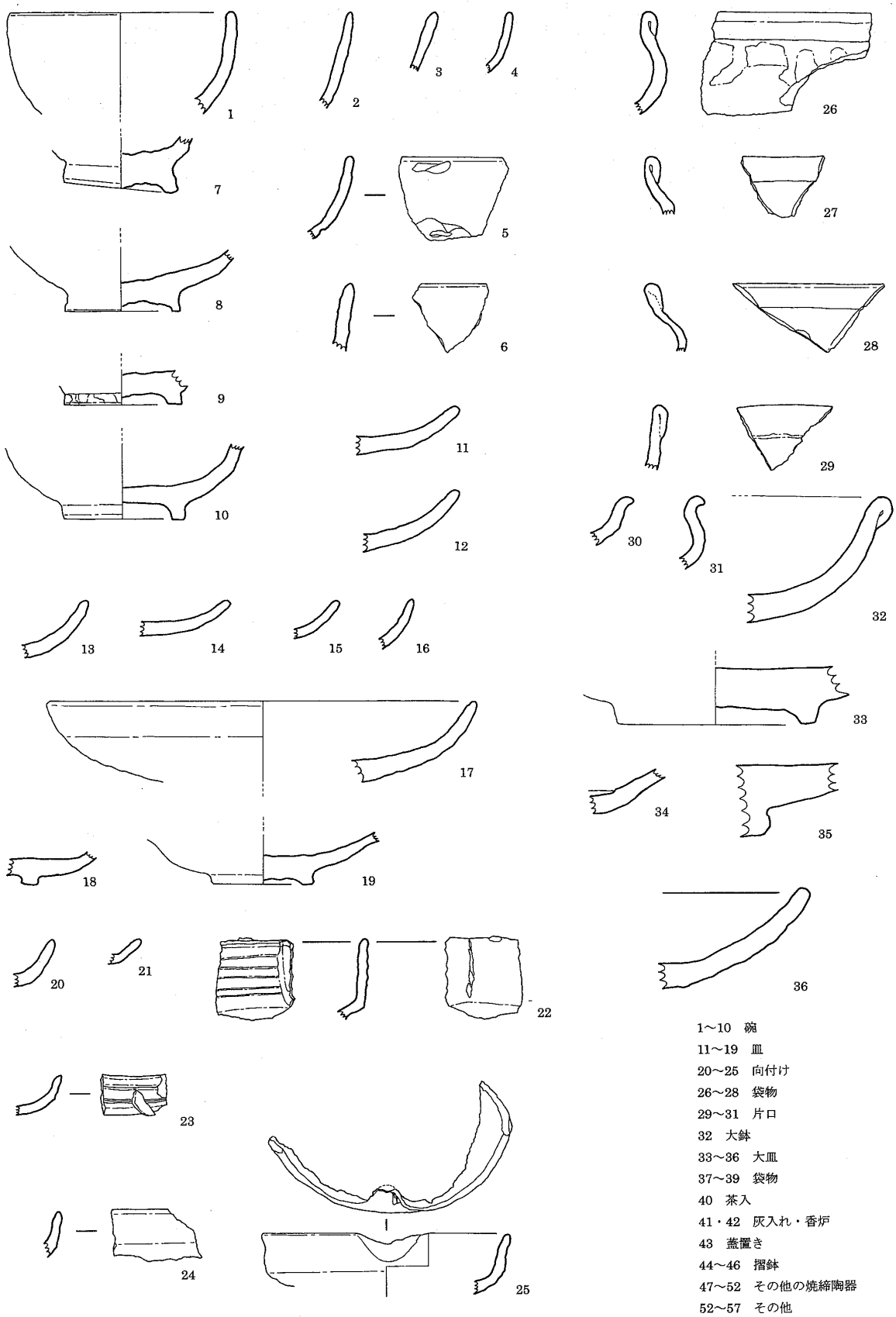
11～17は、皿の口縁部分である。いずれも灰釉を施され、若干の白色砂粒を含む。16に関しては、口縁部の立ち上がり方や器壁の薄さから、向付の可能性も考えられる。17は口径18.3cmが復元される。

18・19は、皿の高台部分で灰オリーブ調の発色を呈する灰釉を施す。19は、高台削り出し後、高台内をなだらかに浅く削るが、18は高台を明瞭に削り出す。18・19ともに高台部付近に焼成時のモミガラ痕が確認でき、18には内面に焼成時の灰降り痕が確認でき、また、高台畳付きには糸切り痕跡が確認できる。

向付（20～25）

20～25は、碗や皿などの画一性をもった器種の一群とは区別される器形を呈す製品と推定される一群で、その器面の装飾性の強さから向付けの器種に比定される可能性が高いものである。

20～22は、灰釉が施され口縁部下において内側へ屈曲する。浅い器形が想定される屈曲である。22は、20・21より深い器形を呈するものと推定され口縁端部から、3cmほど下方で内側へ屈曲する。器壁外面には、横方向にヘラ彫り装飾が施され、彫り込み内に釉薬が流れ込むことによって生じる釉薬の濃淡によって器壁の装飾効果を上げている。また、ヘラ彫り後、器壁の一部を故意に内側に歪めて沓形系の装飾をしている痕跡が内面に確認できる。23・24は、藁灰釉を施したもので、口縁部下において内側へ屈曲する。釉調は明オリーブ灰色を呈し、部分的に青み掛かった発色を呈する。23の外面には、糸目状の彫り装飾を巡らし、口縁部を際立たせている。装飾性の強い形態である。24は、沓形系であろうか。25は、釉薬の掛かっていない素焼き段階の未製品であると推測さ



1～10　碗
11～19　皿
20～25　向付け
26～28　袋物
29～31　片口
32　大鉢
33～36　大皿
37～39　袋物
40　茶入
41・42　灰入れ・香炉
43　蓋置き
44～46　摺鉢
47～52　その他の焼締陶器
52～57　その他
58・59　土師質土器

第3図　遺物実測図①

れる。丁寧な造形で、口縁端部より1.3㎝下方で内側へ屈曲し、それ以下はヘラケズリによって器面を整えている。また、口縁部の一部に、ヘラ状工具か指によって内側に歪ませた痕跡が観察でき、「なぶり縁」[5]装飾を行っていたことが確認される。

袋物（26～28）

26～28は、釉薬が口縁部分にのみ施されていることから、壷などの袋物であると推定される一群である。口縁部の作りは、いずれも外面に折り曲げて作るタイプである。26は、内外面ともに口縁部付近のみに灰釉を施す。外面の釉薬は流し掛けだが、内側の釉薬は、口縁部以外はきれいに拭き取っている。27・28は、焼成が悪く、釉薬の本来の発色は不明である。

片口（29～31）

29・30は、口縁部の作りが26～28の袋物と同系統の作りであるが、内面前面に灰釉が施されているタイプで、片口または鉢といった器形が推定できる。30のほうが器壁厚みから大型製品であったことが分かる。また、30・31は口縁部を外反させるタイプの作りである。30には、灰釉を施す。31は素焼きの状態で、焼締陶器製品と思われる。これらも片口・鉢といった器形が推定できる。

大鉢（32）

32は、大鉢の器形を呈していたと推定される。口縁部は外に折り曲げて成形するタイプで大型製品と思われる。焼成不良の為、本来の発色を見せないが灰釉を施していた様である。

大皿・盤（33～36）

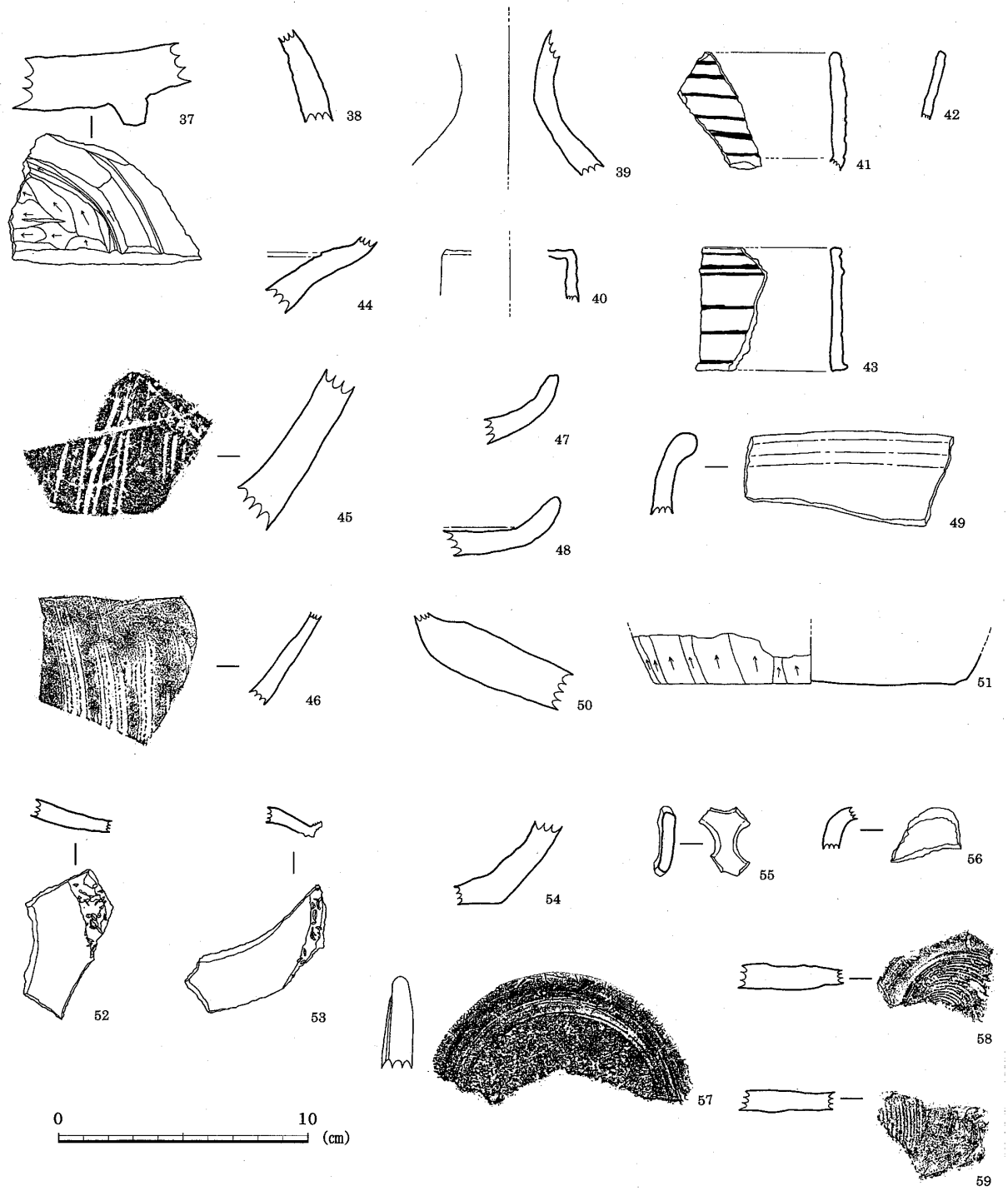
33～36は、大皿もしくは盤と推定される一群である。33は、高台部分と推定されるもので、高台部分を丁寧に削り出し、内面には灰釉を施す。高台径は、8.6㎝を測る。34は、立ち上がり部分で、見込みを区画する段を設けていたことが確認される。器面には、灰釉を施している。35は、胎土が他の製品と比較して精良で白色砂粒をほとんど含まない。器面調整は、内面は平滑に仕上げられ、外面は高台部付近に回転ケズリ調整をおこなっている。完全な土師質であり、素焼き段階のものと考えられる。36は、大型製品であったことが推定される。高台部付近に回転ケズリ調整を施していたことが確認できる。内面から口縁端部にかけては無釉で、焼成時の灰降りが確認できる。また、陶片断面にも釉薬が掛かり、焼成時に破砕したものと推定される。

袋物（37～39）

37～39は、袋物になると推定される製品である。37の器形は、大皿や盤の他に内面の器面調整の粗さから壷の可能性が高い。残存部分に釉薬は施されていなかった。内面には、灰降りが観察されるが、重ね焼の痕跡とも考えられる。38・39は、共に灰釉が施されている。38は、内面無釉で破片上方と推定される方向から釉薬の流れ込みが確認できる。瓶である可能性が高いが、大型製品になる印象を受けるので、甕や壷・水差しである可能性も考えられる。39は、瓶の頸部である。

茶入（40）

40は、肩衝の肩部分になると推定される破片である。器面には灰釉を施し、内面途中からは無釉である。


37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
0
10
(cm)

第4図　遺物実測図②

灰入れ・香炉（41・42）

41・42は、共に筒形の器形を呈する点と、内面が口縁部分以外は無釉である点の二点の特徴から香炉か灰入れと推定される製品である。41は、垂直に立つ胴部外面に、六条の糸目状のヘラ彫り沈線で装飾されている。釉薬は、灰釉が施されている。42は、焼成不良であるが、灰釉を施したものと思われる。また、焼け歪んでいる。

蓋置き（43）

43は、茶道具の「蓋置き」という器種である。茶道の作法中において、鉄釜の蓋を置く台である。寸詰まりの円筒形を呈し、器壁が薄く、丁寧な作りである。外面には、口縁部および、その下1cmほどのところに二条の突帯を設け、さらにその上下にヘラ彫り装飾を施す。釉薬は、鉄釉が用いられ、鈍い赤褐色を呈している。口径・底径は、それぞれ5.6cm・6.0cmが復元され、畳付き部分には焼成時のモミガラ痕が確認できる。

摺鉢（44～46）

44～46は、摺鉢である。44は、口縁部から体部にかけて二段階に分けて屈曲するタイプのものである。内面に摺目が一本確認できる。比較的上手の製品で口縁部にのみ灰釉が施され、摺目を有する体部は露胎で、その境界を沈線によって画する。45は44と比較して薄づくりで、口縁部から体部にかけて屈曲するタイプであると推定される。45と同様に口縁部のみへの施釉が想定されるが、焼成不良の為、本来の発色は確認できない。粗い摺目が確認できる。46は、焼締陶器の製品で、厚い作りである。摺目の一単位は、三本か四本と推定される。内面は焼成不良であるが、外面は良く焼締まり自然釉が掛かる。また、外面に亀裂が入っているが、それは焼成時における内面と外面の収縮率の差が原因であろう。

その他の焼締陶器（47～51）

47・48は、焼締陶器の皿や盤であると推定される。共に内面は平滑に仕上げられ、48には、見込みと立ち上がり部の境を沈線によって画する。49は、焼締陶器製品であるが、焼け歪んでいて器形は不明である。鉢や盆、盤などの大型製品になると推定される。この製品は他製品と比較して、白色砂粒の量が多いのが特徴である。

50～52は、焼締陶器甕の陶片である。50は甕の肩部、51・52は、底部である。51は、内面に少量の灰釉が付着しているのが確認できる。51には、底部に繊維状の圧痕と焼成時のモミガラ圧痕が確認でき、また、底部側面には縦方向のケズリ調整が入る。

その他（52～57）

52～57は、全て器種を特定しえない施釉陶器の陶片である。52・53には、共に灰釉が施され、内面には、焼成時のモミガラ痕が確認できる。蓋である可能性が考えられる。54は、内面に灰釉を施しているのが確認でき、釉薬を施した上手の甕や大鉢の類いである可能性がある。55・56には、青味の強い藁灰釉が施され、55は、大皿もしくは鉢の透かし部分である可能性が考えられ、同様の製品が推定内ケ磯窯製品に確認される[6]。56は大鉢が考えられるか。

57は、器種は特定しかねるが何らかの蓋である可能性がある。胎土は非常に精良であるが、素焼き状態の破片である。この資料の存在から、二度焼きを行っていた可能性が考えられる。

土師質土器（58・59）

58・59は、土師質土器の底部であると推定される破片である。胎土には、赤色粒子・白色砂粒・金雲母を含み、内面立ち上がり部に強いナデ調整が入るタイプのものと推定される。その作行から、当窯の製品であるとは考えがたい[7]。

第二節　採集窯道具資料

A～Cは、小型のトチンで手捏ね成型である。いずれも下部のみの残存である。Aは、底面のみ被熱があまい。底径は、7.0cmが復元される。

Dは、中型のトチンで手捏ね成型である。製品から焼け飛んだ釉薬が付着する。上面には、焼成時のモミ殻痕が付着する。底径は、7.0cmが復元され、釉だれ及び焼成痕から、高台径5cm程度の製品を載せたものと考えられる。

E～Gは、大型のトチンで、やはり手捏ね成型である。Fの底面には、砂とモミ殻が付着する。また、製品から焼け飛んだ釉薬が付着する。底径は、Eが10.0cm、F・Gが12.0cmを測る。釉だれ及び焼成痕から、高台径7～8cm程度の製品を載せたものと考えられる。

Hは、小型のハマで手捏ね成型である。面は、約9.0cmを測り、釉だれ及び焼成痕から、高台径7～8cm程度の製品を載せたものと考えられる。Iも、小型のハマで手捏ね成型である。Hと比較して薄い作りである。上面には、製品から流れ落ちたと推定される木灰釉らしき釉薬の付着が観察できる。面は、約10.5cmを測り、釉だれ及び焼成痕から、高台径7～8cm程度の製品を載せたものと考えられる。

Jは、大型のハマで、やはり手捏ね成型であると考えられるが、底面は、なんらかの工具で平滑に仕上げたものと考えられる。

第三節　窯体片採集資料

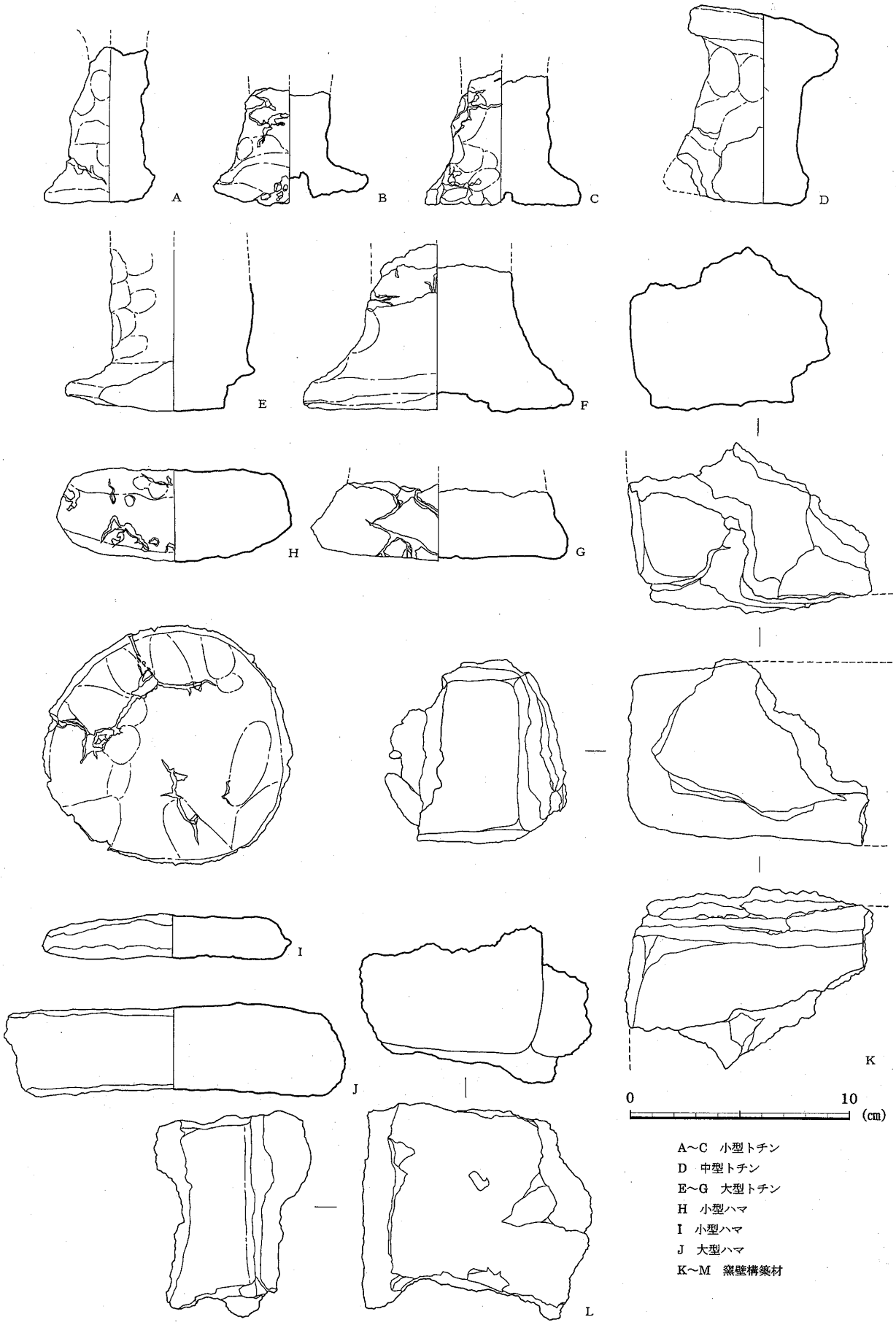
K・L・M・Nは、窯体の骨材とも言うべき窯構築材と推定され、直方体のレンガ状の形状を呈する。胎土には、2cm角の石を含む。いずれにも、多くの指頭痕が確認でき、基本は手捏ね成型と思われるが表面には繊維状の圧痕が確認され、藁などの繊維質を用いた工具でタタキ締め成形、もしくはナデ仕上げ調整をおこなったものと考えられる。残存の一面は、一辺約7～8cmが計測される。

Kは、「レンガ状粘土隗」に粘土を塗り込み窯壁としていたことを示す資料である。K（粘土厚約1.2cm）は、製品焼成時に焼け飛んだ釉薬が窯壁に付着し、焼成時の高温によって窯壁が金属調に化学変化をおこしたものである。Lは、二つの「レンガ状窯材」が粘土によって連結されており、「積んで」使用されたことを証明する資料である。

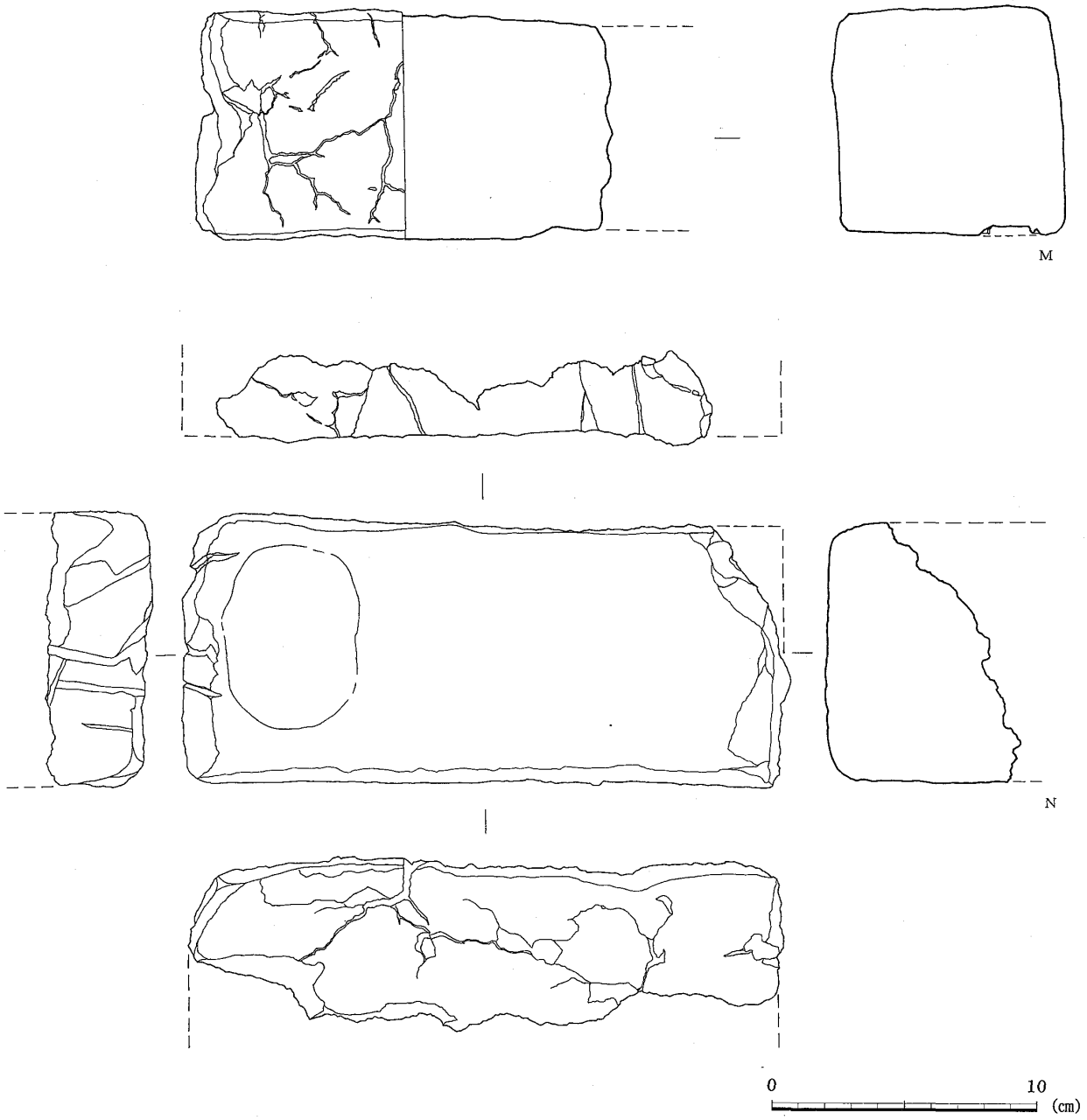
他にも、被熱痕跡を有し、製品から飛んだ釉薬が掛かる自然石の存在から、それらが窯材の一部として使用されたものと推定される資料も存在する。

M・Nは、粘土の塗布が確認されない資料である。Mは、全5面中（復元6面）、長面の1面（底面？）のみが被熱を受けない。サイズ（縦／横／奥行き）は、9.0cm／（15.0＋α）cm／9.0cmが計測される。Nは、一面のみしか残存しないが、本来はMと同サイズの直方体を呈すると考えられる。サイズ（縦／横／奥行き）は、（6.0＋α）cm／22cm／9.5cmが計測される。Nの表面には釉薬の付着が確認され、残存面の中央部のみに強い被熱痕跡が確認され黒色に変色している。

K・L・M・Nは、肥前・筑前諸窯で十七世紀の中頃に築窯に使われ始めるトンバイに酷似するが、波越窯築窯の時期設定に大きくかかわってくる要素となるので、ここでは、「レンガ状窯材」（窯構築材）と表現



第５図　窯道具・窯壁構築材実測図



第6図　窯壁構築材実測図

し、次章以降に問題解決を持ち越すこととする。

第三章　波越窯の焼造技術と年代観の検討

前章で、波越窯表面採集資料遺物における、おおまかな観察を行った。この章では、肥前・筑前における築窯技術や製品の製作技術・焼造技術と波越窯のそれらとを比較検討したい[8]。

（1）波越窯製品の製品趣向と胎土

波越窯製品には、所謂上手の製品である装飾性の高い向付け類、茶入、灰入れ・香炉、蓋置き等の茶陶が焼造されている。これらの製品は、この窯の「築窯者（＝資本者）」の趣向や運営方針をよく反映していると考えられる。また、これら茶陶に用いられている胎土は、よく水漉されており、他の製品と比較すると、茶陶・雑器小物・雑器大物・焼締陶器小物・焼締陶器大物と、製品の性格によって、精製度の異なる胎土の使い分けがなされていた事が分かる。

（2）モミ殻の付着

8・9の碗や18・19の皿の高台部畳付き、51の甕の底部にはモミ殻の付着が確認できる。このモミ殻は焼成時に製品の窯床溶着を防止する為に、製品と窯床の間にモミ殻を敷いた痕跡である。また、52・53は器形が不明ながらも、その内面にモミ殻を付着させている。

このようなモミ殻を用いた窯詰め方法は、肥前諸窯でも古い段階に比定される窯製品に確認されている[9]。その窯詰め技法の確認できている窯として、土師野尾古窯群内中道古窯（諫早市）[10]、大川原1号窯（伊万里市）[11]、大山口窯跡（伊万里市）[12]、小十窯（唐津市）[13]、飯洞甕上窯（北波多村）[14]、祥古谷窯（武雄市）[15]、小山路窯（武雄市）[16]、七曲窯（武雄市）[17]、小森窯（西有田町）[18]など、いずれも胎土目積陶器段階に比定されている窯である。また、同じ朝鮮系技術を持つ、高取系の永満寺宅間窯跡（直方市）[19]、内ヶ磯窯跡（直方市）[20]においても確認される。

しかし、窯詰め方法の相違は、有田においては有効に時期差を反映しているが、有田の周辺地域には、その法則に当てはまらない地域も存在するようである[21]。例えば、大草野窯（塩田町）においては、胎土目を有する溝縁皿が確認されている[22]。

窯詰め方法の相違は、九州に製陶技術を伝える以前の朝鮮半島内においての、地域差、そして、その地域の歴史を背景に持つ技術系統の差異を示すものである可能性を念頭に置いておく必要があり、このことは窯構造においても同様である。

また、今回の採集資料においては製品の内面に目跡のあるものの存在は確認しておらず、現段階においては製品を重ね積み焼造した可能性は考えていない。村上伸之氏の研究によると[23]、「窯詰め技法を規定する要因」として、主に①「生産技術差」、②「需要量」、③「製品の性格」、④「製品のレベルやランク」、⑤「生産効率」の五要因を挙げられている。波越窯においては、①「重ね積みをしない技術或いは性格」、②「供給市場の限定性」、③「量産化・効率化を意識しない性格」、④「目積みという品質低下要因の不在」、⑤「生産効率の無視」とそれぞれ対応するであろうか。波越窯は、供給市場の限定性から、あまり大量生産を意識しない生産を行っていたと推定される。また、九州内における独自の技術変化や、その背景となる近世的な生産様式への変容においての意味付けも重要となってくるであろう。

(3) 摺鉢の形態

摺鉢は44～46の三種類が確認できた。44においては、摺目が1本しか確認できず、摺目の単位の有無、また単位は確認できない。器形は、口縁下に段を有するタイプで、肥前の小溝上窯(有田町十六世紀末～一六三〇年代)[24]や土師野尾古窯跡群内中道古窯(諫早市十六世紀末～17世紀初頭)、大山口(丸岩)窯(伊万里市一五九〇～一六〇〇年代)[25]、神谷窯跡(伊万里市)[26]の出土品に類似するものと考えられる。45においては、体部から内側につまみ上げられるタイプになるものと考えられる。これも、中道古窯出土品に類似するものと考えられる遺物である。また、46は、体部から口縁部まで直線的に開くタイプである。小溝上窯は、胎土目積陶器段階に焼造を開始し、砂目積み段階を経て、寛永十四(一六三七)年の窯場整理・統合事件によって廃窯になったと推定されている窯である。中道古窯も胎土目積段階に比定されている窯である。

その他、皿の口縁部形態に、胎土目積段階の特徴を有するものが存在するようである[27]。また、大皿の透かし部分と推定される55は、高取系の内ケ磯窯製品と推定品に類似する[28]。

(4) 釉薬について

今回の採集資料において確認されている釉薬の種類には、鉄釉・灰釉・藁灰釉が確認できている。鉄釉・灰釉については、唐津系陶器の草創期～末期まで不偏的に用いられる釉薬であるが、今回、注目すべきものは、「藁灰釉」を施釉された製品である。

藁灰釉は、朝鮮半島北部系の釉薬ではないかと言われている釉薬である[29]。肥前においての藁灰釉の使用は、草創期の唐津陶器窯とされる岸岳系の・皿屋窯(北波多村)・帆柱窯(北波多村)[30]・山瀬窯(浜玉町)などで白濁した藁灰釉を多用しているのが知られている他は、伊万里市藤ノ川内の茅ノ谷窯(伊万里市)に見られる以外は、あまり見られないようである。また、肥前においては藁灰釉の使用は減少する傾向が確認されている[31]。

筑前上野・高取焼においては、十七世紀以後、藁灰釉は、青味の強いものが用いられ始め[32]、同じ技術集団の流れをくむ小代焼にも盛んに用いられたようである[33][34]。採集資料には、3・6の碗、23・24の向付、55・56の器形不明の製品に藁灰釉の施釉が考えられ、焼成の悪い27の壷にも可能性がある。いずれも青味を帯びた発色で特に3・23・24・55は特に青味が強い。

これらのことから波越窯表面採集資料は、上野・高取系の藁灰釉に近い発色をしていることが指摘され、朝鮮半島における技術集団と系統を同一とする可能性が高いと考えられるが、岸岳系の皿屋窯出土品も青味が強いものが見られ、今後日本国内での藁灰釉の伝播系統にも留意が必要であると思われる。

また、波越窯においては、藁灰釉を比較的上手の製品に用いる傾向が看取される。

本窯で用いられている灰釉は、土灰釉と細別される釉薬である。土灰釉も胎土目積段階までで、胎土目積から砂目積への移行段階以降は使用が減少するグループの釉薬である[35]。なお、鉄絵装飾に伴うことの多い石灰釉・長石釉は鉄絵とともに確認できなかった。

(5) 窯道具について

窯道具は、大小2グループのI字形トチンと、やはり大小2グループの円盤状ハマを確認している。すべてが手捏ね成型で、胎土目積み段階

～胎土目から砂目積移行段階の窯道具の特徴を備えているが、どちらかと言うと古段階の胎土目積段階のものに近いようである。大橋氏の製品・窯道具・窯壁構築材から分類した第1グループに該当し、大橋製品編年のⅠ期の製品に伴うものと考えられる[36]。

（6）窯体について

窯体の破片としてK・L・M・Nを採集している。K・L・M・Nは、レンガ状に成型された粘土塊で高熱を受けていることが観察され、Kには粘土が塗布されていたことがわかる。

類似のものが、胎土目積段階に比定されている小溝上窯（有田町十六世紀末～一六三〇年代）[37]や土師野尾古窯跡群内中道古窯（諫早市十六世紀末～十七世紀初頭）[38]、大山口窯（伊万里市一五九〇～一六〇〇年代）、焼山中窯（伊万里市十六世紀末～十七世紀初頭）、葭の本窯（佐世保市十六世紀末～十七世紀初頭）[39]と、高取系の永満寺宅間窯、内ヶ磯窯、白旗山窯[40]で出土しており、これらのものは、オンザノス（通焔孔）の内部を支える骨材と推定されている。

また、K・Lは粘土表面がガラス状或いは金属調に変化している。このことから、窯体が、窯壁に粘土を塗り込めて築窯する、「塗壁式壁体」の窯体であったことが推定される。窯体が本当に「塗壁式壁体」による構築法であれば、やはり、大橋氏の製品・窯道具・窯壁構築材から分類した第1・2グループに該当し、肥前における胎土目積み段階時期の築窯に比定され、大橋製品編年のⅠ～Ⅱ期の製品に伴うものであると考えられる[41]。よって、これらのことを加味してもK・Lをはじめとする一群は骨材に粘土を塗り込んだ分焔柱の一部と考えるのが、最も妥当であろう。

Nは、残存面の中央部のみに強い被熱痕跡が確認され黒色に変色しているが、これはおそらく、通焔孔の上部に高架させたものと推定され、よく焼けている部分を計測するとオンザノスの通焔孔は約10cmが復元される。通焔孔上部の構造が、はっきりと判明している例は少ない。管見では、このような「レンガ状窯材」の用い方は、前述の永満寺宅間窯の例が最も古いものの一つである。十七世紀初頭の開窯と考えられている永満寺宅間窯跡においては通焔口の分焔柱上部に三段横架させたものに限り、ガラス状を呈していたことが報告されている[42]。従って、粘土を塗布された「K・Lをはじめとする一群」については、永満寺宅間窯跡と同様に粘土の塗り込められた奥壁上部に位置する分焔柱の上部に横架させ積み上げたものであると推察される。また、トンバイという六面体のレンガ状のものを積んで築窯した場合、六面中、一面のみにしか粘土が付着しないはずが、Lには二面に渡って粘土が付着しているものが確認される。これらのことから、奥壁と通焔孔上部には粘土が塗り込められていたことが推定される。

勿論、「K・Lをはじめとする一群」を奥壁の構築材と考えることもできる。しかし、奥壁に「レンガ状窯材」を用いる例は、高取系においては寛文五（一六六五）年～十（一七〇〇）年頃開窯、元禄十七（一七〇四）年頃閉窯と考えられている磁器（青磁）・陶器併焼窯（陶器主体）の鼓釜床1号古窯跡における例が初例で[43]、肥前においては、操業期間一六三〇～一六五〇年代と推定されている磁器・陶器併焼窯である中野窯跡（平戸市）内の皿焼窯では奥壁の一部に、同窯跡内茶碗窯は奥壁の一部と側壁に用いている例、同じく操業期間一六三〇～一六五〇年代と推定されている三股青磁窯（波佐見町）において奥壁基礎に確認されている例の二例が最古の例であるとされる[44]。

高取系に先行する肥前においても磁器併焼の砂目積段階の窯まで待たなければならない。これらのことから、胎土目積段階に比定される可能性の高い波越窯においては「レンガ状窯材」を奥壁に用いていたと考えることは否定的に成らざるを得ない。

従って、K・Lをはじめとする一群は永満寺宅間窯と同様に通焔口上部に積まれた「レンガ状窯材」に粘土を塗り込めたものと考えられ、M・Nを含む一群は、煙出し部に用いられた可能性を残しつつも、おそらくは通焔孔（オンザノス）の部分に用いられたものと推定される。特にNは、通焔孔上部に高架されたものと特定できる。

以上のことから、波越窯採集の「レンガ状窯材」から推定される窯構造は、小溝上窯[45]、大山口窯や土師野尾古窯跡群内中道古窯[46]、葭の本窯[47]等と同じく胎土目積段階～砂目積段階の様相を備えていると考えられる。また、「レンガ状窯材」によって焼成室を隔していたと考えられるので、「階段状」とまでは言及できないが、少なくとも「連房式登窯」の構造を呈していたことが想定される。以上の指摘から、波越窯の窯構造は、肥前もしくは筑前上野・高取系からの影響を受けたものである可能性が高いと考えられる。

小結

これまで、（1）～（6）の考察において、波越窯の築窯・操業年代は肥前諸窯における胎土目積段階に比定される可能性が高いことがほぼ固まった。さて、問題であるのは、この「レンガ状の粘土塊」が十七世紀中頃から肥前諸窯で窯壁構築材として用いられ始める「トンバイ」に相当するか否かという問題で、この問題は窯の構造及び存続期間に深く影響する問題である。

波越窯のレンガ状窯材は、肥前の初期唐津と同様に、朝鮮系技術の流れを汲む上野・高取焼や萩焼の初期窯跡においても同様のものが確認されている。波越窯採集の「レンガ状窯材」は、本章の考察において、通焔孔及びその上部の部分に使用されたものであると推定するに至った。

では、肥前・筑前の窯構造において、通焔孔の構造はどのように変遷していったのであろうか。そして、波越窯の通焔孔の構造はそれらのどの時期に該当するのであろうか。以後、肥前・筑前の諸窯と比較して若干の検討を加える。

肥前の胎土目積段階の窯における分焔柱の設け方としては、帆柱窯（北波多村一五八〇～一五九〇）[48]、小山路窯（武雄市十六世紀末～十七世紀初頭）、七曲窯（武雄市十六世紀末～十七世紀初頭）では「円筒形の粘土塊支柱」に粘土を塗布したもの、皿屋窯（北波多村一五八〇～一六〇〇）、飯洞甕上窯（北波多村一五八〇～一六〇〇）、唐人古場窯跡（多久市一五八〇～一六〇〇）[49]では「直方体に加工した砂岩」に粘土を塗布したもの、焼山上窯（伊万里市一五八〇～一六〇〇）[50]では「角柱状の割石」、川古窯ノ谷窯（武雄市）は「礫石」を用いている例が知られ、これらは分焔柱として整然性を欠く（第1表参照）。

同じく胎土目積段階に比定されている小溝上窯（有田町十六世紀末～一六三〇年代）、大山口窯（伊万里市一五九〇～一六一〇年代）や土師野尾古窯跡群内中道古窯（諫早市十六世紀末～十七世紀初頭）[51]、葭の本窯（佐世保市十六世紀～十七世紀初頭）[52]で出土しているものなどは、「直方体の形状を呈した粘土隗」すなわち「レンガ状」の形状を呈し、通焔孔の分焔柱の内部を支える骨材と推定されている。

高取系においては、十七世紀初頭（一六〇六～一六一四年頃）の半地山式割竹型登窯であると考えられている永満寺宅間窯跡では、通焔孔が

窯跡名	系統	段階	年代	分焔柱	
永満寺宅間窯跡	高取系	胎土目積段階	1606年～1614年頃	「方形柱状のレンガ状にしたもの（トンバイ）」	福岡県直方市
内ヶ磯窯跡	高取系	胎土目積段階	1614年開窯	「方柱の粘土を焼きしめ煉瓦状にしたもの」	福岡県直方市
白旗山窯跡	高取系	胎土目積段階	1630年開窯	「長方形のレンガ状のもの」	福岡県飯塚市
坂1号窯	萩系	胎土目積段階	17世紀前半	「細長い煉瓦状のブロック」	山口県萩市
帆柱窯	肥前岸岳系	胎土目積段階	1580～1590年代	「円筒形の粘土塊支柱」に粘土を塗布したもの	佐賀県北波多村
小山路窯	肥前系	胎土目積段階	16世紀末～17世紀初頭		佐賀県武雄市
七曲窯	肥前系	胎土目積段階	16世紀末～17世紀初頭		佐賀県武雄市
皿屋窯	肥前岸岳系	胎土目積段階	1580～1600年代	「直方体に加工した砂岩」に粘土を塗布したもの	佐賀県北波多村
飯洞甕上窯	肥前岸岳系	胎土目積段階	1580～1600年代		佐賀県北波多村
唐人古場窯跡	肥前系	胎土目積段階	1580～1600年代		佐賀県多久市
焼山上窯	肥前系	胎土目積段階	1580～1600年代	「角柱状の割石」	佐賀県伊万里市
川古窯ノ谷窯	肥前系	胎土目積段階		「礫石」	佐賀県武雄市
小溝上窯	肥前系	胎土目積段階	16世紀末～1630年代	「直方体の形状を呈した粘土塊」	佐賀県有田町
大山口窯	肥前系	胎土目積段階	1590～1610年代		佐賀県伊万里市
土師野尾古窯跡群内中道古窯	肥前系	胎土目積段階	16世紀末～17世紀初頭		長崎県諫早市
葭の本窯	肥前系	胎土目積段階	16世紀～17世紀初頭		長崎県佐世保市
天狗谷古窯	肥前系	砂目積段階	1620～1670年代	「レンガ状の粘土塊」	佐賀県有田町
山辺田窯址群	肥前系	砂目積段階	16世紀末～1660年代		佐賀県有田町
原明古窯	肥前系	砂目積段階	16世紀末～1630年代		佐賀県西有田町
迎の原古窯跡	肥前系	砂目積段階	16世紀末～1630年代		佐賀県西有田町
畑ノ原窯跡	肥前系	砂目積段階	1600～1630年代		長崎県波佐見町
中野窯跡内皿焼窯	肥前系	砂目積段階	1630～1650年代		長崎県平戸市

第１表　初期唐津・高取系古窯における分焔柱構造

「方形柱状のレンガ状にしたもの（トンバイ）」によって構築されていたことが報告されている[53]。また、同系統の内ヶ磯窯跡（一六一四年開窯）においても通焔孔が「方柱の粘土を焼きしめ煉瓦状にしたもの」によって築かれていたことが報告されており[54]、同系統白旗山窯（一六三〇年開窯）にも「長方形のレンガ状のもの」が出土している[55]。一方、十七世紀前半に位置付けられる萩焼の坂1号窯においては、煙出し部に「細長い煉瓦状のブロック」を7本用いていることを報告している[56]。

また、砂目積段階の窯においても通焔孔のみに「レンガ状の粘土塊」を用いている例が知られる。天狗谷古窯（有田町一六二〇～一六七〇年代）[57]、山辺田窯址群（有田町十六世紀末～一六六〇年代）[58]、原明古窯（西有田町十六世紀末～一六三〇年代）[59]、迎の原古窯跡（西有田町十六世紀末～一六三〇年代）[60]、畑ノ原窯跡（波佐見町一六〇〇～一六三〇年代）[61]、中野窯跡（平戸市一六三〇～一六五〇）[62]等の例が挙げられる。

その後、十七世紀中頃になると、前述の通り、肥前では中野窯跡・三股青磁窯、筑前では鼓釜床1号窯といった磁器を焼成することを前提とした窯に、トンバイという窯壁構築材を奥壁及び側壁に用い始めるようである。これらの時期、特に鄭成功と関係の深い平戸に存在する中野窯に関しては、中国系特に南部の漳州窯系技術の影響かと思われる[62]。

以上のことをまとめると、「レンガ状窯材」を用いる段階としては、以下の段階を経るものと考えられる。

①「粘土塊支柱や砂岩、割り石、礫石などを通焔孔に用いる段階」
②「レンガ状窯材を通焔孔にのみ用いる段階」・「通焔孔のみでなく、その上にも数段積み上げる段階」
③「奥壁に用いる段階」、「奥壁・側壁に用いる段階」

この三段階の変遷は、肥前・筑前に、ほぼ共通するものと考えられる。通常、肥前において「トンバイ」と呼称されているのは、③「奥壁に用いる段階」、「奥壁・側壁に用いる段階」を指すものである。

波越窯の「レンガ状の粘土塊」は、肥前のいわゆる磁器焼成窯の奥壁及び側壁に用いられる「トンバイ」と比較して、窯を構築する窯材としての「用い方」、「整然性」という点で未成熟である点が指摘される。むしろ、小溝上窯（有田町）や大山口窯（伊万里市）、土師野尾古窯跡群内中道古窯（諫早市）[63]、葭の本窯（佐世保市）[64]等のオンザノス（通焔孔）の内部を支える骨材と推定され、胎土目積段階の様相を備えているようである。波越窯の窯構造は胎土目段階中、②「レンガ状窯材を通焔孔にのみ用いる段階」・「通焔孔のみでなく、その上にも数段積み上げる段階」の後者に比定され、胎土目段階においても比較的新式であると推定できる。

以上のことから、考古学上、製品・窯道具・窯構造ともに波越窯を肥前の胎土目積段階に位置付けるのが妥当であると思われる。

第四章 歴史的背景から見た波越窯築窯の推定年代

波越窯の稼働年代は、前章までの考古学的な肥前の窯構造・窯出土製品との比較・検討から、胎土目積段階、即ち一五八〇～一六一〇年代の間に位置付けられる窯体・製品であることが分かった。

本章では、史実を追って築窯可能な時期を考察し特定したい。

第一節 考古学的年代観

現在、胎土目積段階の時期幅は、肥前における編年観に基づくと、肥前系陶器の出現期に位置付けられている岸岳系の一群を一五八〇年代～一六〇〇年代とやや古く焼造期間を比定する以外は、一五九〇年代～一六一〇年代という期間がその焼造期間であるとされている[65]。また、その現象は、消費地における出土傾向からも、その年代観が立証されている。

代表的な消費地遺跡である大坂城跡の発掘調査においては、石山本願寺期～豊臣期～徳川期という時期変遷が、造成による盛土層や、戦火による焼土層などの層序よって明らかにされ、各層遺構面に時期を与えることが可能である[66][67]。石山本願寺期（一四九六～一五八〇年）には、出土陶器の主体は瀬戸・美濃陶器が占め、唐津系陶器が含まれていないのだが、次の豊臣前期（～一五九八年前後）になると、慶長三（一五九八）年銘木簡にともなって、極少量ではあるが胎土目積段階の唐津系陶器・信楽系軟質陶器・黄瀬戸の出土が見られはじめることが分かっている。

そして、秀吉の遺言である「三の丸」普請（一五九八・一五九九）の盛土層であるとされる豊臣後期の古い段階以降には、瀬戸・美濃陶器に代わって唐津系陶器が市場における主役の座を奪う。

この時期には、唐津の中でも古いとされる岸岳系の唐津が目立ち、志野も出現する。また、大坂夏の陣（一六一五）によって形成された焼土層には織部が出現する。続いて、元和（六・七年）銘木簡に伴って胎土目積段階の唐津系陶器・退化した織部の出土する層の1つ上層（一六三〇～一六四〇年代？）からは、初期伊万里にともなって砂目積の唐津系陶器溝縁皿・刷毛目唐津が出土し始めることが分かっており、むしろ、胎土目積段階製品より砂目積段階製品のほうが遺物構成内の割合が高い。砂目積溝縁皿の年代は、窯出土資料と合わせ考察して、一六一〇～一六三〇年代の焼造期間が考えられている。

また、堺環濠都市遺跡ＳＫＴ19地点出土の天正十三（一五八五）年銘木簡共伴例も報告されている[68]。

この考古学的事実を踏まえて、一五九〇～一六一〇年代の間に豊後国佐伯の地に朝鮮系技術による陶器窯の築窯が可能であった領主とは誰であろうか。当時の豊後国の情勢を通して、その人物を割り出すこととする。

まず、考古学的年代観から大友氏時代である佐伯惟定の築窯は考えられない[69]。従って、築窯は豊臣期以降のこととなる。大友氏除国後、豊後は太閤蔵入地とされたが、文禄二（一五九三）年以後は、秀吉の側近たちに小分割配領された[70]。

『駒井日記』によると、検地後文禄二年の時点で、佐伯が含まれる海部郡は北海部郡と南海部郡に二分され、北部二万八〇〇〇石分は垣見（筧）家純が代官となり、南部一万六八〇〇石分は、検地を行った宮部法印が管轄したとされる。北部は、福原、後には太田が大名として入部するが、南部は太閤蔵入地として存続したようである。

この太閤蔵入地であるが、この代官を務めた者として現時点では二説ある。太田一吉説と毛利高政説である。両者とも、軍監として朝鮮出兵に従軍しており、朝鮮系製陶技術流入のルートとしては両一族とも可能性が考えられる[71]。

関ヶ原の合戦後の慶長六（一六〇一）年には、佐伯に前述の外様大名である日田・玖珠郡の大名毛利高政が、転封してきた[72]。波越窯の築窯には、この時期が最も妥当であると考えられる。

第二節　大名の趣向について

江戸幕府の開幕以後、文化的交流を背景とした諸大名間の外交折衝において茶会やそれに用いる茶器のやり取りなどが盛んに行われていたことが、文献資料などにおいても確認できる。

東京都丸の内三丁目遺跡においては、その大名たちの茶道のたしなみを象徴するかのような遺物が出土している[73]。丸の内三丁目遺跡は、慶長九年以後、鍛冶屋橋門内として、大名や旗本が屋敷を構えた土地である。

毛利高政もこの地に江戸屋敷を構えた[74]。絵図によると、慶長年間～貞享年間にかけて、屋敷跡地には「森伊勢守」・「毛利伊勢守」・「毛利市三郎」・「毛利イセ」などの記載がある。毛利氏の屋敷は、明暦三年の大火において類焼してしまうが、寛文十二年の松平土佐守との屋敷替えまではこの土地に存続したようである。

藩邸比定地の元禄以前と判断し得る遺構から、茶陶然とした織部などの瀬戸・美濃産陶器や、肥前・志戸呂・備前産の陶器製品、中国製品を主体とした（肥前産磁器が少量混じる）磁器製品の出土が多く見られる。

これらの遺構群は、毛利伊勢守藩邸比定地を中心とした地区から多く検出されている。勿論、江戸時代初期の「一般的」遺物組成の具現かもしれないが、比定地内の52号土坑の遺物組成中、瀬戸・美濃産天目茶碗に偏りを見せ、黒織部の沓茶碗や備前の水差しと思われる茶陶然とした遺物群が出土していることは目を引く。

第五章　文書からの検討

第一節　文書から見た波越焼

波越窯製品の窯跡比定地以外からの出土は、一九九七年に佐伯市教育

委員会が調査を行った天祐館遺跡からの出土一例のみが知られる[75]。この資料は、消費地遺跡からの出土という面においては、その流通の存在を肯定し、一般的な流通の存在までは示せないまでも私的な流通レベルにおいては十分にその存在を示していると言える。

また、佐伯藩政資料中[76]、『「世戸焼・佐伯焼物之帳」抜書』の慶長十七（一六一二）年五月二十八日には、「佐伯焼の盆」の記述が見られ、元和六（一六二〇）年三月二日の『「世戸焼佐伯焼御改帳」抜書』には、「佐伯やきノ盞の臺。内弐つ八青薬、一つ八薬かけず」の記載が見られる。「佐伯焼」・「佐伯やき」の記載を、ただちに波越窯製品であるとは断定しがたいが、一つの可能性として時期的にも器形的にも重要な記載であると言えよう。

第二節　文書による築窯者・廃窯時期の検討

高政は寛永五（一六二八）年に死去するが[77]、波越窯はいつまで存続したのであろうか。また、その時期に佐伯の地に朝鮮半島系の技術をもって築窯が可能であった人物とは誰であろうか。

波越窯の存在する佐伯市堅田の波越村は、高政の慶長六年の佐伯入部と同時に弟である毛利吉安に分知されたと考えられ、その所領二千石中の床木村・堅田（塩月、西野、府坂、棚野、石打、波越、泥谷、津志河内、柏江の九ケ村）の十ケ村中に属していた[78]。このことは、「慶長十年豊後国玖珠・日田・海部郡之内御蔵入知行高目録」（一六〇五年）において確認できる[79]。

以下、「慶長十年豊後国玖珠・日田・海部郡之内御蔵入知行高目録」内、海部郡の部分を抜書きする。

「一高壱万九千石　　海部郡之内毛利（高政）伊勢守知行
　　物成三千九百九拾石四斗壱升弐合七勺九才
　　内高弐千石　　毛利（吉安）九郎左衛門知行
　　〆
　　慶長拾年七月十日　　毛利伊勢守　　」[80]

しかし、吉安は寛永十（一六三三）年に跡目争いを発端とするお家騒動がもとで、二千石の分知領を幕府に差上地として返上する。以後、しばらくは佐伯藩預かり地となったが、用水路の利権がもとで騒動が起こると、寛文八（一六六八）年～天明三（一七八三）年の間には、日田代官の管轄下に属した[81]。

以上の記述から、波越窯の築窯が、毛利吉安の指図であった事実が判明する。また、それと同時に、少なくとも波越窯の焼造期間の下限を、堅田御料差上の寛永十年で区切る事が可能であると考えられる[82]。

勿論、廃窯の原因が現在知られている歴史的契機のみであるとは断定できない。すなわち、考古学的成果である肥前陶磁との比較検討による相対年代と歴史学的成果をクロスデーティングすることによって、波越窯の焼造期間を一六〇〇年代～一六一〇年代と限定し得たが、ここで改めて、歴史学的観点から、波越窯が少なくとも寛永十（一六三三）年までには廃窯に至っていたと幅をもって条件付けることができるのである。

第六章　まとめ

前述のごとく、考古学的・歴史学的側面の両面から、波越窯の「築窯時期と操業期間の推定」、「築窯者（＝資本者）の特定」と言った二つの

問題点から考察してきた。

「築窯時期と操業期間の推定」においては考古学的観点より、製品や窯道具からは、同じ朝鮮系の製陶技術を持つ肥前諸窯・高取系諸窯製品との比較から、胎土目積段階～砂目積段階移行期に比定され、戦国時代末期から江戸時代初期にかけての製品であることが推定された。

また、佐伯の地における歴史学的観点からは、戦乱による疲弊、中央政権に連動した目まぐるしい支配者の交替という時代背景から、築窯可能な時期は、江戸時代に入って後のことであると推定するに至った。また、波越窯の位置する堅田の波越村が、佐伯藩藩政開始直後より藩主毛利高政の弟である毛利吉安[83]の所領とされている事実から、この吉安の指図による築窯であったと考えられ、このことから波越窯がお家騒動の起こった寛永十（一六三三）年までには廃窯に至っていたと条件付けた。

以上、考古学的成果である十六世紀末～十七世紀初頭（一五九〇年代～一六一〇年代）という推定焼造期間は、歴史学的観点による十六世紀末の佐伯における築窯は困難であるとの判断から、波越窯の築窯は十七世紀初頭に、幅を見ても一六〇〇～一六三〇年代に限定されるに至った。そして、更に限定するならば、考古学的成果である一五八〇～一六一〇年代という年代幅、そして、歴史学的成果である一六〇一～一六三三年という二つ年代幅をクロスデーティングすることによって、波越窯跡の稼動年代幅を一六〇一～一六一〇年代という年代幅に限定することが出来るのである。

謝辞

本論稿を世に送るにあたって、多くの方々の御助言、御協力など、並々ならぬ学恩に浴す事ができた。

とりわけ、九州近世陶磁学会において共同発表という機会を与えてくださった大分市教育委員会の玉永光洋氏には、その格別の御配慮を賜り、ここに謹んで深謝を捧げさせていただきます。

また、他学の学生である私に、ご指導を加えていただいた西南学院大学の丸山雍成先生の御厚情も忘れる事ができません。九州歴史資料館（当時）の副島邦弘氏には、遺物の鑑定、高取焼きの特徴について特にご教示を頂き、貴重なご助言を頂くことができました。佐伯市所蔵の資料の見学に御配慮を頂いた吉武牧子氏、様々な助言を与えてくださった大分県教育委員会の吉田寛・田中裕介両氏に対しても感謝が堪えません。有田町教育委員会の村上伸之氏にも、有田の窯構造について、ご教示を頂きました。

そして最後に、多大なるご教示と学会において私の拙い発表を許していただいた九州陶磁文化館の大橋康二氏、鈴田由紀夫氏に深く感謝いたします。

また、諸氏からの多大なる学恩に対し、ここに記して感謝の意を表します。家田淳一（九州陶磁文化館）、高島裕之（駒沢大学禅文化研究所）

追記

本稿は、二〇〇〇年に開催された第十二回関西近世考古学研究会資料にて紙面発表した『初期唐津併行期「豊後波越窯跡」（一六〇〇～一六一〇年代）－表面採集資料による考察－』会）に若干の修正を加え論文の体裁に整えたものである。

1 この論文は、平成10年2月21日～22日に行われた第8回九州近世陶磁学会（「江戸前期における九州・山口地方の陶器」－窯跡資料を中心としたー）において発表した「大分県の陶器と製作技術－大分県佐伯市所在「波越焼窯」採集資料について－」を基にまとめたものである。玉永光洋・上野淳也「大分県の陶器と製作技術－大分県佐伯市所在「波越焼窯」採集資料について－」『第8回九州近世陶磁学会資料』1998 九州近世陶磁学会

2 岩田善市「波越焼－亡び失せた郷土の陶藝」『佐伯史談37号』1968 佐伯史談会

3 この波越窯を対象とした研究は、平成二年度に大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館（現大分県立博物館）においておこなわれた秋季企画展図録『やきもの－豊のくらしと文化』においておこなわれた秋季企画展図録『やきもの－豊のくらしと文化』において若干触れられたのみである。大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『図録　やきもの　豊のくらしと文化』1990

4 豊田寛三・後藤宗俊・飯沼賢司・末廣利人『大分県の歴史』1998 楢本譲司・豊田寛三『大分県史近世篇』1979

5 器の口縁部を、指や工具などによって故意に「歪み」を作り出す装飾法である。

6 高鶴元『日本陶磁体系15　上野・高取・八代・小代』1990 平凡社 西田宏子・尾崎直人『福岡県史　文化資料編筑前高取焼』1992 財団法人西日本文化協会

7 大橋康二氏より、ご教示頂いた。

8 大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 1993 ニュー・サイエンス社

9 村上伸之「肥前における初期の陶器生産に関する考察－主として地域差の問題を中心に－『有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館　研究紀要　第6号』1997 有田町歴史民俗資料館・有田焼参考館

10 秀島貞康・下川達彌ほか『土師野尾古窯跡群』1985 諫早市教育委員会

11 大橋康二『大川原1号窯跡』肥前地区古窯跡調査報告書第11集 1994 佐賀県立九州陶磁文化館

12 陣内康光「唐津・飯洞甕窯を中心に－岸岳古窯跡の発掘調査－」『東洋陶磁学会第27回大会研究発表資料　1999 東洋陶磁学会

13 中島直幸・田島龍太『小十古窯跡』1988 唐津市教育委員会

14 同掲資料12

15 原田保則『武雄市内古窯跡群発掘調査報告書Ⅳ（祥古谷窯跡・新立山窯跡）』1997 佐賀県武雄市教育委員会

16 原田保則ほか『武雄市内古窯跡群発掘調査報告書Ⅰ（小山路窯跡・川古窯ノ谷下窯跡）』1994 佐賀県武雄市教育委員会

17 原田保則ほか『七曲窯跡』1993 武雄市教育委員会

18 大橋康二『小森窯』肥前地区古窯跡調査報告書第9集 1992 佐賀県立九州陶磁文化館

19 副島邦弘『古高取永満寺宅間窯跡』1983 直方市教育委員会

20 副島邦弘・木下修・日高正幸ほか『古高取内ヶ磯窯跡』1982 直方市教育委員会「…小型の瓶類では、モミと思われる痕跡が残る。」

21 同掲書9

22 岩吉栄治・峰崎幸清『大草野窯跡調査概報－町内古陶磁窯跡発掘調査1－　1997 佐賀県塩田町教育委員会

23 同掲書9
24 大橋康二『楠木谷窯・小溝上窯』1987 九州陶磁文化館
25 船井向平「大山口窯について」『第8回九州近世陶磁学会資料』1998 九州近世陶磁学会
26 盛峰雄『神谷窯跡（甕屋の谷窯跡）』1987 伊万里市教育委員会
27 同掲書3
28 同掲書6
29 中里太郎右衛門『日本陶磁体系13 唐津』1989 平凡社
30 大橋康二『北波多村帆柱窯』1995 九州陶磁文化館
31 同掲書8
32 大橋康二氏より、ご教示を得た。
33 中里太郎右衛門ほか『世界陶磁全集7 江戸（二）唐津 上野 高取 薩摩 萩 九州 中国 四国 陶器諸窯』1980 小学館
34 高鶴元『日本陶磁体系15 上野・高取・八代・小代』1990 平凡社
35 同掲書8
36 大橋康二「肥前古窯の変遷－焼成室規模より見た－」『佐賀県立九州陶磁文化館研究紀要第1号』1986 九州陶磁文化館
37 村上伸之・野上建紀『小溝上窯・向ノ原窯』1995 有田町教育委員会
38 同掲書10「築窯に際しては、分焔柱のみにトンバイを使用し、他は粘土を塗り込めて作る。」
39 佐世保市教育委員会『葭の本窯跡範囲確認調査報告書』1982「…通煙孔用のトンパイの抜き跡がある（2号窯）。」
40 嶋田光一ほか『遠州高取白旗山窯跡』1992 飯塚市教育委員会
41 同掲書8・36
42 同掲書19「横架されたレンガ状トンバイはガラス状を呈していた。」
43 日高正幸『鼓釜床1号古窯跡』1994 小石原村教育委員会
44 中野雄二『三股青磁窯跡の調査－第2回波佐見くらわんか会資料』1998 波佐見町教育委員会
45 村上伸之・野上建紀『小溝上窯・向ノ原窯』1995 有田町教育委員会
46 同掲書10「築窯に際しては、分焔柱のみにトンバイを使用し、他は粘土を塗り込めて作る。」
47 久村貞男・山口正人『葭の本窯跡範囲確認調査報告書』1982 佐世保市教育委員会「…通煙孔用のトンパイの抜き跡がある（2号窯）。」
48 同掲書30「柱は枕状の大きな粘土隗を芯にして粘土を巻いて作る。」
49 西村隆司『唐人古場窯跡』1994 唐人古場窯跡調査会
50 盛峰雄『金石原窯辻窯跡・焼山上窯跡・焼山中窯跡・市ノ瀬高麗神上窯』1988 伊万里市教育委員会
51 同掲書10「築窯に際しては、分焔柱のみにトンバイを使用し、他は粘土を塗り込めて作る。」
52 同掲書39「…通煙孔用のトンパイの抜き跡がある（2号窯）。」
53 同掲書19「…隅丸の楕円形で、いわゆるコッペパン型をした粘土を焼きしめたものと、方形柱状のレンガ状にしたものトンバイ横架させたものが…」
54 同掲書20「…柱の上には方柱の粘土を焼きしめ煉瓦状にしたものを横架させたのが一段残っている。」
55 同掲書40「基本的には、温座の巣（通焔孔）の上部の壁だけにトンバイを使用し、その部分の左右壁には花崗岩、砂岩を用いて補強を行っているが、その他、奥壁、左右壁と天井は粘土で構築していたようである。」、「柱間には、柱と類似した円柱状に粘土を焼いた筒を構架させる。」、「温座の巣(通炎孔)の上部の間仕切りに用いられたと推定…」、

「…方柱状の煉瓦を構架させ、その間を粘土で目張りしている。」など

56 中村徹也ほか『萩焼古窯－発掘調査報告書－』 1990 山口県教育委員会

57 三上次男『有田天狗谷古窯』 1972 有田町教育委員会

58 三上次男『佐賀県有田町山辺田窯址群の調査』 1986 有田町教育委員会

1・2・3・6・・7号窯においては通焔孔（分焔柱）のみに、4号窯・8号窯においては、奥壁に採用されていたようである。

59 森醇一郎『原明古窯跡』 1981 西有田教育委員会 「トンパイ(煉瓦)によって通焔孔（吸焔孔）が形造られ、…」

60 芝元静雄・森醇一郎・岩永政博『迎の原古窯跡』 1977 西有田教育委員会

「通焔孔のトンパイは、…」・「…吸焔孔（オンザン）のトンパイも焼き付き、全んど残っている。」

61 佐々木達夫『畑ノ原窯跡』 1988 波佐見町教育委員会 「奥壁には、高さ50㎝ほどに通炎孔（温散、狭間、温座の巣）が9個ほど並ぶ。この部分だけにレンガ状耐火粘土（トンバイ、トンパイ、トンバリ）が使用され、他の壁は厚さ10～20㎝ほどに粘土を塗ったようである。」

62 平戸市教育委員会 1994『中野窯跡の発掘／平戸和蘭商館跡の発掘5／馬込遺跡の発掘3』平戸市教育委員会

63 同掲書10「築窯に際しては、分焔柱のみにトンバイを使用し、他は粘土を塗り込めて作る。」

64 同掲書39「…通煙孔用のトンパイの抜き跡がある（2号窯）。」

65 同掲書8

66 鈴木秀典ほか『大阪城跡Ⅲ』1988 財団法人大阪市文化財協会

67 森毅「大坂出土の十六・十七世紀の陶磁器－美濃陶器を中心に－」『東洋陶磁VOL.25』 1996-97 東洋陶磁学会

68 野田芳正他『堺環濠都市遺跡発掘調査報告－市之町東4町 SKT19地点－』（堺文化財調査報告第20集） 1984 堺市教育委員会

69 佐伯惟定は朝鮮出兵に従軍しており、朝鮮系の技術を持つ陶工を捕虜にした可能性も考えられるが、大友吉統の豊後除国以後、惟定は蜂須賀家に預けられており、その後、藤堂家に士官した為、佐伯の地には朝鮮出兵以後、帰還してはいないようである。

70 文禄二（一五九三）年には、山口玄蕃や宮部法印の検地のもと海部郡には垣見（筧）弥五郎（家純）、大分郡には早川主馬、大野郡には太田小源五（一吉）、直入郡には熊谷半次（直陳）が代官として派遣され、宮部もその年のみ日田・玖珠郡の代官を務めた。

その後、文禄二年から三年にかけて、大分郡府内には早川長敏、直入郡岡に中川秀成、海部郡臼杵に福原直高、国東郡高田に竹中重利、国東郡富来に垣見（筧）家純、国東郡安岐に熊谷直陳、玖珠郡角牟礼に毛利高政、日田郡隈に宮城（宮木）長盛が、それぞれ大名及び代官として着任した。また、慶長二（一五九七）年までには、早川氏は府内から杵築へ転封、福原氏は臼杵から府内へ転封、太田氏は大野郡代官から臼杵へと転封に成っている。

71 高政は、佐伯に入部した後、朝鮮出兵の際に連れ帰った、朝鮮人僧侶の庄庵に梶西金左衛門という名を与え、五十石で召し抱えている。このことは、朝鮮人を連れ帰っていたことを明確にしており、その中に陶工も含まれていた可能性は十分に考えられる。

72 前述の海部郡南部一万六八〇〇石分に津久見の赤河内村、保戸村、警固屋村（後に、奥河内村、井牟田村、鬼丸村の一部と交換）、床木村

を加えた佐伯藩一万九〇〇〇石（後、二万石）がここに成立した。

73 （財）東京都教育文化財団・東京都埋蔵文化財センター『丸の内三丁目遺跡―東京国際フォーラム建設予定地の江戸遺跡の調査―』1994

74 豊田寛三・橋本操六編『佐伯藩資料温故知新録二』1997 佐伯市教育委員会

「佐伯藩江戸上屋敷覚」に「……一御上屋敷元和御治世之砌、御拝領者鍛冶橋御門内大名小路之通り二而、当時松平土佐守様・松平阿波守様御屋敷之間夕二而候、……」

75 吉武牧子『天祐館遺跡』1998 佐伯市教育委員会

76 豊田寛三・橋本操六編『佐伯藩政資料目録』1979 佐伯市教育委員会

77 同掲書73

『徳川実紀』（「大猷院殿御実紀」巻十二）の寛永五年十一月十六日に高政の死が記されている。佐伯藩資料にも「一　御代々勤仕書写」に「元祖従五位下伊勢守高政春秋七十歳、寛永五戊辰年十一月十六日於江府卒、」とある。波越窯の性格を「お楽しみ焼き」と考えた場合、高政の没年が廃窯期である可能性が高くなる。

78 慶長六（一六〇一）年以後、即ち佐伯入部直後から吉安の所領であったので吉安の築窯であった可能性が高いと考えられるが、朝鮮人技術者の登用や築窯費などの諸費用のことを考えると、高政の介在も考えられる。

79 同掲書73

80 また、吉安は、毛利氏旧領である日田においても、二千石を領していたようである。このことは、後の写しではあるが、「佐伯拝領後高政公等事跡并召出家臣履歴等覚」により判明する。[80] 以下、文書中の秀吉からの朱印状の部分の書き写しを抜書きする。

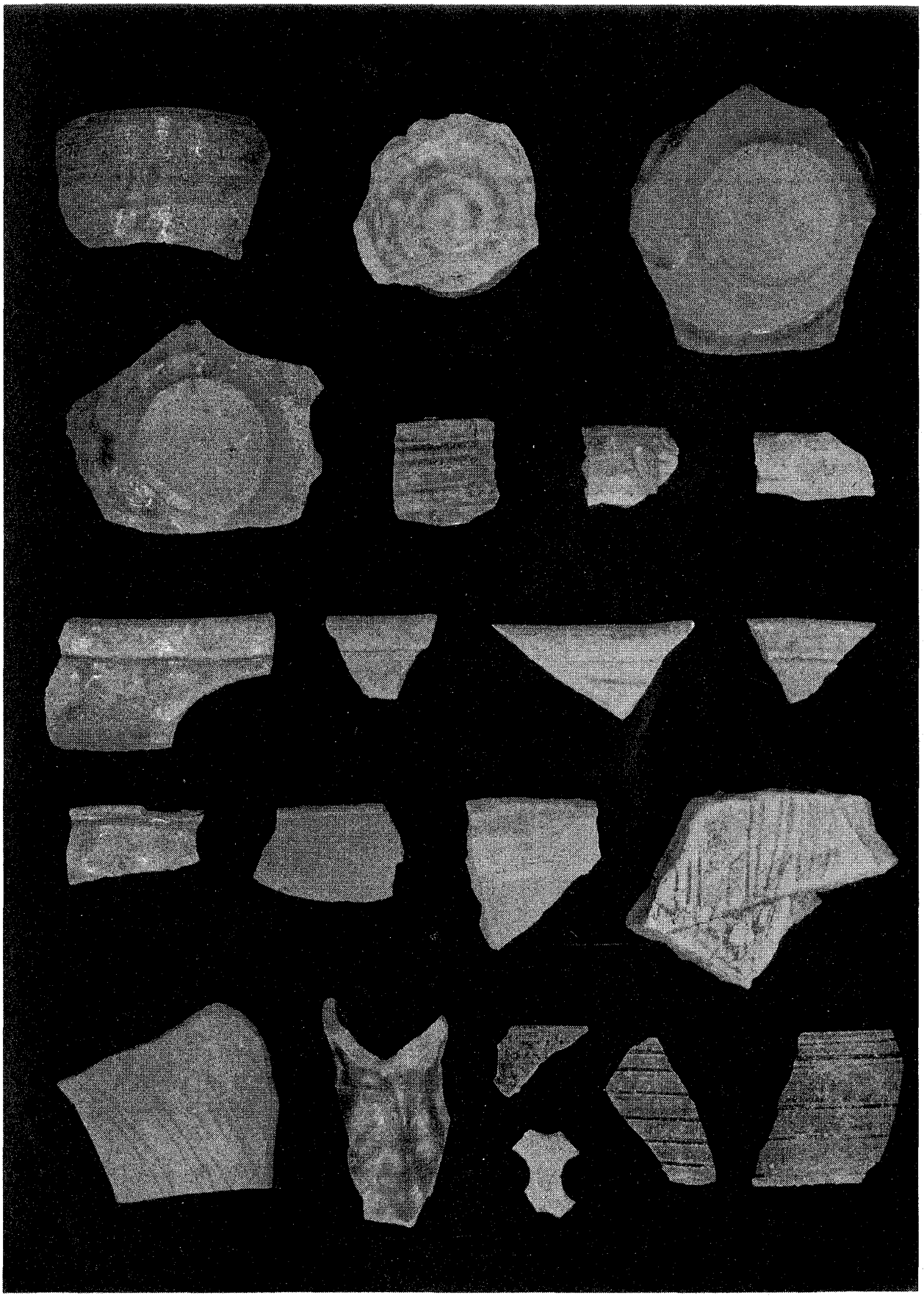
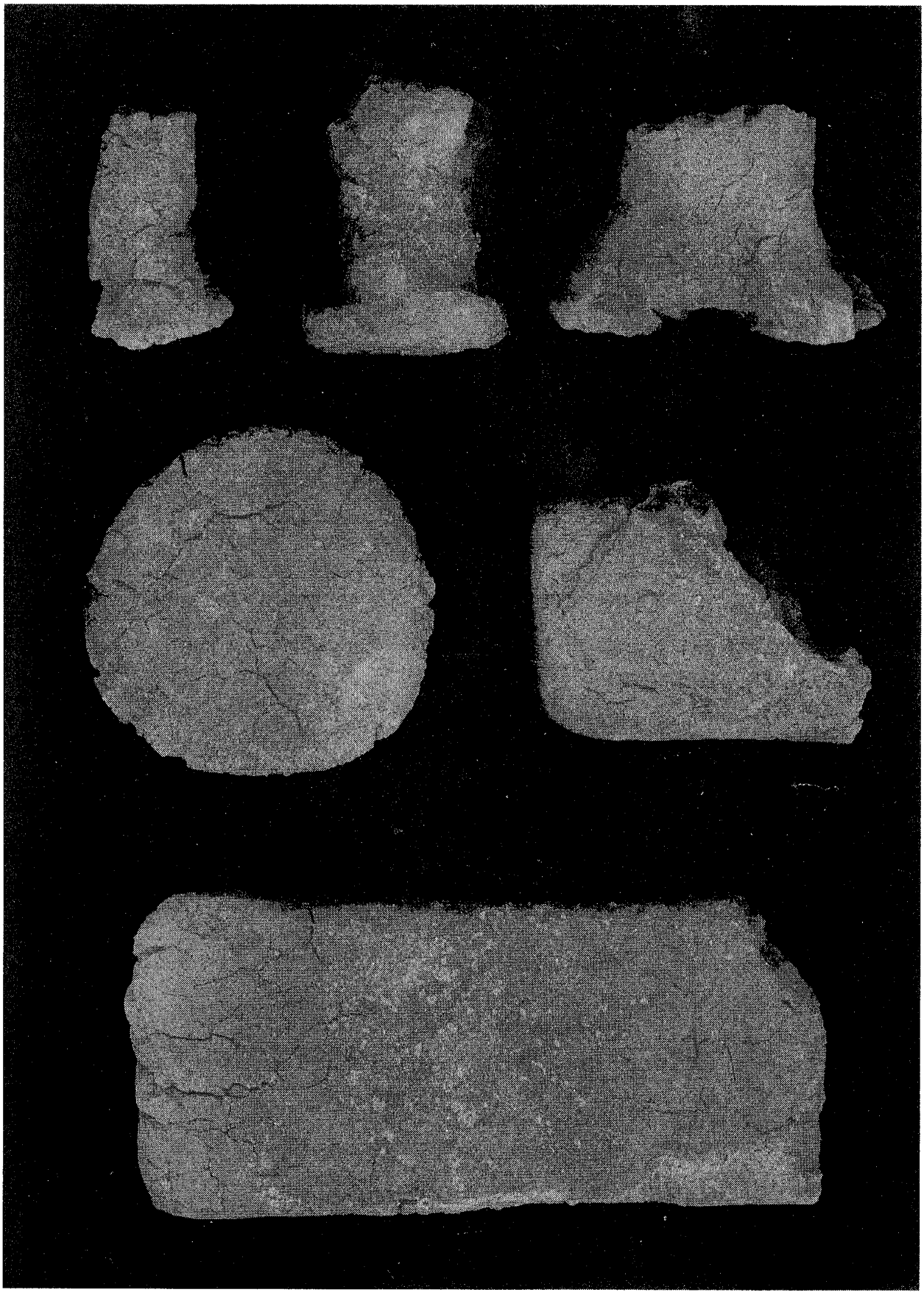
「豊後国日田郡之内高弐万石令附所畢、
内千石者父九郎左衛門、弐千石者弟権六江
令配分、残壱万七千石之軍役可領知者也、
文禄四未年九月日
毛利民部大輔殿　」

文書によると、吉安（権六）は文禄四年には、日田郡内で既に二千石を拝領していたようで、その二千石分を佐伯においても堅田の地に拝領していたと思われる。

81 この事実は、後世の資料にはなるが、延享二年に日田代官岡田庄太夫から堅田御料の所以を尋ねられた折に、塩月村から差出された『堅田御料二付塩付村（ヨリ）差出候覚』に明示されている。以下、堅田御料の始まりに関する部分を抜書きする。

「　覚
一御料始り者、佐伯御分知毛利伊勢守様御舎弟毛利九郎左衛門
様江二千石分り候処、寛永十六乙卯年御差上地二被成、夫（より）寛
文二壬寅年迄廿四年之間、伊勢守様御嫡子同主膳様御預り被
成、則寅年御代官所二成而、」…

豊田寛三・橋本操六編『佐伯藩資料温故知新録三』1999 佐伯市教育委員会

82 可能性として、寛永十年と寛文八年の二つの説が考えられるが、幕府領となった寛永十年には廃絶してしまったと考えてよいであろう。

83 毛利吉安は、朝鮮出兵にも軍監として従軍しており他の九州諸大名と同様に、陶器焼造に興味を持ち、朝鮮人陶工を連れ帰っている可能性が十分に考えられる人物である。